

創学舎創立四十周年に寄せて



早いもので、創学舎も創立四十周年となりました。

創立は一九八五年、ちょうど日航機の事故があった年でしたので、よく覚えています。**最初の教室**

は住宅地の中の柏市布施教室。一年後に新松戸教室を開校して二教室体制となりました。創立当時から高校部門をつくり、小五から高三までの生徒が在籍していましたが、当時**高校部門がある学習塾は珍しかった**と思います。**四人で創業した創学舎**、失敗したことも多くありますが、そのなかで、今につながるお話をいくつか取り上げてみます。

テキストは当時から手作りで、プリントゴッコを本格的にしたような印刷機で印刷製本していたのを覚えています。印刷用の原紙を製版し、それを印刷機にセットして印刷開始。一枚刷り上がるまで五分はかかったでしょうか。今はボタン一つで、両面印刷や連写も可能ですが、当時はほぼすべて人力です。事務の人で、印刷製本作業のし過ぎからか、腱鞘炎になってしまった方もいました。それに比べると、今は楽になりました。こういった機械の進歩は素晴らしいものがあります。コロナが流行ったときに、ズームで遠隔授業をしましたが、何十年前では夢物語でした。ただ、成果は今一つで、やはり対面で授業することの大切さが

実感できた次第です。

数学のテキストは今と同じ形式で、例題、練習、挑戦と三種類の問題を用意して、授業での解説、授業中の練習、宿題に対応していました。市販のテキストは、一問教えるためにどこまでの周辺知識が必要かを考えて授業の準備をしなければならず、大変手間のかかるものでした。その点、**オリジナルテキストはスモールステップで一問ずつ解いていくと自然にレベルがアップする優れたもの**。何年もたって、東京の大きな書店に行くと、創学舎のオリジナルテキストのようなテキストを市販しているではありませんか。目が点になってしまいました。ひよっとして、創学舎のテキストも、日本中に売れたのかも……。

英語では、教科書を何とか覚えさせたいと考え、教科書暗唱テストを考案。形式を変更しながら継続し、現在の教科書英文テストに至ります。

練習用のテキストを作成し、生徒も練習しやすく、教師もチェックしやすい。だから継続できる。きちんと練習すれば、誰でも高得点、できれば満点を取れる。そして、継続することで英語の力がつく。ウインウインのテストです。このテストを続けていると、生徒も英語の力がつくことが分かっているのでしょう。普通、中学生に「テストするよ」というと嫌がりますし、「今日はテストがないよ」というと、「やったー」と喜びます。毎回実施している英文テストですが、たまたま「今日は英文テストは無いよ」というと、「やったー」と言いながら、どことなく残念な表情になるのです。やはり、能力が向上することは快感に通じるのでしょうか。自分の状況を客観的に言葉にできない子供でも分かるものですね。ただ、最近の英語の教科書は、会話重視のため文法的には疑問符のつく文が

載っていたり、単語がかなり難しかったりするもので、英語が苦手な生徒にはやりにくくなっているかもしれません。

オリジナルテキストは、形式も様々工夫しました。たとえば、暗記が中心のテキストや繰り返し解かせたい問題のページは、左右のページを同じ内容にして、片方は書き込み用、片方は復習用。使いやすくなると思いますが、ページが倍になりますから、重くなりました。生徒には不評だったかもしれません。さて、テキストは教務室で作成していましたが、狭い教務室で、教師は全員喫煙者。部屋には煙がモクモクと立ち上る。時代が違うといえそうですが、タバコを吸わない事務の人たちには申し訳なかったな、と反省しています。昔は夜の授業が終わってからがテキスト作成などの時間。塾タイムと言われていました。自動車で通勤していましたが、終電も関係なく、延々と仕事が続きます。今では考えられません。柏の東口にあったサイゼリアという店で食事をして、気がつくとも閉店の時間。確か夜の三時頃だったかしら。サイゼリア東口店は居心地がいい店でした。サーブしてくれていた方はよく気が付く方で只者ではない、と思っていました。後にサイゼリアの常務になっていました。あの方ならそうだなと納得。

生徒の呼び方は、創立時から男子生徒は何々君

女子生徒は何々さんで統一してきました。他塾では、あだ名で呼んだり、何々ちゃんと呼んだり、人によつて様々な塾もあったようですが、創学舎では小五から高三まで長い生徒ですと八年間通います。あまり生徒との距離が近づきすぎると八年間いい関係は続けられません。やはり、適度な距離をとって接することが関係を長続きさせるコツ

です。

生徒には漢字テスト、文法テスト、英文テスト、英単語テスト、計算テストなどたくさんのテストを課しています。特に、英文テストは全社員が採点することになったため、できれば社員全員がすらすらと採点できることが望ましい。それにこれからは英語は社会生活でも避けて通れない重要な知識である、ということ、途中から**社員も英文テストと漢字テストを毎週受けること**になりました。英文テストは英語の先生は間違わないかというところ、そうでもありません。やはり、人間たるもの、間違えるときは間違えます。ケアレスミスをするときは、今書いていることに意識が向かっていないときです。次の予定など他のことを考えているときに間違えます。数学の計算間違いも同じ。とにかく、大切なことは、今書いていることに意識を向かわせること。大人も子供も変わりません。社員も小テストをしてから、**生徒の気持ち****がそれまで以上に分かるようになりました。**

学習塾は学力をつけることが目的の一つです。学力とは何かと言いつつ難しくなりますが、学習計画をつくれること、計画に沿って学習を継続すること、知識のインプットとアウトプットができるように訓練すること、テストで得点力を向上することなどが含まれるでしょう。創学舎では、学習計画づくり、学習の継続、効率的なインプットとアウトプットを支援してきました。得点力はそのあとについてきます。「宿題が多い」などと言われることもあります。学習活動は訓練の一種でもあります。テスト前にはワークなどをきちんと解いて、間違えたところを解きなおして自力でできるようにする、といった学習活動の王道を通ってき

たと思っていますし、**これから時代に合う形で王道を進んでいきたい**と考えています。今後ともよろしく願ひいたします。
（大場）

私はHSPです、多分。（その四）

再度HSPの定義から。「非常に感受性が強く敏感な気質をもった人」という意味です。英語では Highly Sensitive Person。病気ではなく、あくまでも気質にすぎません。

（注）気質と性格について大雑把に定義をしておきます。**「気質」** 光や音などの刺激に対する感じ方、反応の強さや速さ、その人の根本気分など先天的にもっている傾向。**「性格」** 気質が根底にある、環境や学習によって形成されるその人独特の考え方や感じ方。

さて、ここまで第一段階……セルフチェック、第二段階……周りにいる現実の人間とチェックを提案してきました。そして、ここから第三段階に入りますが、一部修正です。解釈と分析をまとめて第三段階とします。

第三段階……解釈と分析。「光や音に敏感である」とか「賞味期限を人一倍気にする」とかは気質なので特に問題はありません。慣れれば気にしなくなるかもしれません。ここでは、他人との関わりの中で発生するマイナスの反応に焦点を当てていきます。六月号で挙げた二十七個のそれぞれについて、実例を挙げて説明したいところですが、膨大な量になるので、勝手に「**小中高生あるある**」と思えるものに絞って考察します。**②「いじられて受け流せず嫌な気持ちを抱える」**実例…「いつも同じ服ばかり。ダサイ。」「そうそう。これからダサ男（ダサ女）と呼ぼうぜ。」↓（通常の反応）「うるさいな。ほっとしてくれ。」「この服が好きなのに。」

「服より推しにお金を使いたいの。」「母子家庭でお金がギリギリなんだ。着ない服があつたらくれよ。」↓（HSP的な人の反応）「……」「（下を向いて言い返せず）」「めんね……。」

生徒に限らず、大人同士でもありうる状況です。「学食や食堂に行かずいつも安いパンで昼食している」とよくそんなまずいもの食えるね。信じられない。」「（お金がないので飲み会に参加しないと）付き合ひ悪いよね。」「（帰省してお土産を渡すと、上司が）もうちょつといいもの買って来いよ。これまずいんだよ。」HSP的な人にとっては、世の中はこんなチクチクする言葉であふれています。そして、言っている方は悪気はないかもしれませんが、同じようなチクチクする言葉を発しながら生活しています。ただし、実例として挙げた言葉や通常の反応として挙げた「切り返し」は友人間や家族間ではよくあることです。時には、「ムカつき」「友人に愚痴ったり」して、いつの間にかそれほど気にせず暮らしています。

問題となるのはHSP的な人の場合です。いじられたときの言葉を忘れません。
※以下十月号に続く
（小林）

「敵役」とライバル

最近では時代劇をとんと見かけなくなつた。「水戸黄門」「暴れん坊将軍」のような**勧善懲悪**ものを我が祖父母は好んで見ていて、自分もつられて見るようになった。これらの勧善懲悪ものはストーリーがほぼ決まっています、不正役人と悪徳商人がつるんで庶民から**暴利を貪り**、これら悪人たちを正義の味方である主人公が懲らしめて視聴者の**鬱憤**を晴らすという展開になつ

ているケースが多い。**所謂「お約束」**になつているのだ。

このような「お約束もの」は「お約束」**故に**毎回展開が同じであるため、子どもの私は自ずと飽きが出てきた。そんな中、これらの勧善懲悪ものから興味の持てるものを見出した。「悪役」「ヒーロー」「敵役」の存在である。

「ウルトラマン」にしろ「仮面ライダー」にしろ、ヒーローもの・勧善懲悪もののシリーズにおいて、主人公そのものはいたいして面白くないことが多い。悪役や敵役がどれくらい魅力的かで、そのコンテンツの面白さが決まる。ウルトラマンにおいては怪獣や異星人、仮面ライダーでは怪人など、彼らの役割や存在意義が大変重要である。このような相手は、主人公の「ライバル」と言つてもいいだろう。



彼ら敵役は、シリーズがマンネリ化しないために創意工夫を**不断**に行っている。だからこそ、ライバル足り得ている。新しい技や武器などを次々登場させ、絶えずレベルアップを行うその努力たるや涙ぐましいくらいだ。それでも主人公にやつつけられてしまう。何とも**不憫**であり、彼ら敵役を一度くらい勝たせてやれないものかと**切齒扼腕**していた頃もあった。

さて、これら敵役はあくまでコンテンツ上の演出であり、ヒーローの美学に憧れていた若い頃の私のように、深く考えずに敵役をやるうとするのはお勧めできない。性格がねじ曲がつてしまふ恐れがあるからだ。それよりも、相手が負けたくないと思つてくれるように、自らを高め

る努力をした方がいい。相手も負けじとレベルアップしてくるだろうから、そこで自分も負けないようにさらにレベルアップの努力をする、というように正の循環が起こりやすくなる。

こうしてお互いが刺激となつてレベルアップする関係が重要であり、レベルダウンを誘発するような足を引っ張る行為は**「法度」**であることとは言うまでもない。何はともあれ、まず自分を高める努力することが**肝要**だ。この努力は後々報われることになる。切磋琢磨できるライバルに出会えることで有意義な人生を送れるのではないだろうか。

※ところで、本稿では入試に出そうな二字・四字熟語や読みにくい漢字に敢えてルビを振らず用いている。**勧善懲悪**や**鬱憤**などの傍線部がそれである。学生諸君は読めない漢字や意味が分からない熟語があれば、自分のレベルアップのためにまず辞書を引くことから始めてみては如何？
（山崎）

難関私立対策講座、十月開講！

創学舎では、受験校が確定し私立高校の過去問演習に取り掛かるうというこの時期、毎年「難関私立対策講座」を開講しています。専修大学松戸や芝浦工業大学柏などの問題は質・量ともに公立入試とのギャップが甚だしく、特別な対策が必要です。創学舎では、難関校の問題傾向の分析と精査された問題演習を通して、「難問へのアプローチ法」や「時間配分」などについての確なアドバイスを行います。

【英語・数学 四コマ×七回（集団各教室）】
国語 三コマ×二回（柏教室にて合同実施）